

中国の戦略はどこに向かうか？

漢和防務評論 20161002 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

当面の中国の戦略に関する漢和防務評論の記事を紹介します。
総編集の平可夫氏は、「習近平は、南シナ海問題で日米や ASEAN と外交的、軍事的に対決するのを避け、戦略の重点を対台湾作戦に集中することを希望している」と述べています。
中国海軍が、今日米海軍と力比べして、弱体を露呈すれば、台湾解放が当面不可能になることは目に見えています。

平可夫

外線作戦など積極防御の中国軍、近年来の演習状況、500m・800m・1500m の第三世代浮橋の積極的な架設、これらは、何を示すのか？

中国軍の南シナ海における如何なる挙動も偶然やとりあえず的な動きではなく、すべての部署が相当熟慮を経たものであることが明白になった。この 2 月、中国空軍は、永興島に HQ-9 型地対空ミサイルを配備した。7 月 10 日前後、仲裁案が出される 2 日前にこのミサイルが撤収された。その戦略意図は何か？

なぜ 2 月に永興島に HQ-9 を配備したのか？軍事的に見て、フィリピンの航空攻撃に対処するのでなければ、わずか 2.6 平方 KM に満たない小島に機動式地対空ミサイルを配備する根拠は全くなかったのだ。ロシア防空軍の教材には、長距離地対空ミサイルの機動について次のように明確に示されている。ベトナム戦争期間、人民軍の S-75 地対空ミサイルは米国空軍を効果的に攻撃することができた。その理由は、ベトナム人民軍が長距離対空ミサイルの作戦上の意義、戦法法則を十分理解していたからである。S-75 のベトナム北方での機動回数は毎年平均 1000 回に及んだという。同教材は、ベッカー高原空中戦時のシリア防空軍 SAM-6 の配備方式を厳しく批判していた。陣地は固定し、1 年間で一度も移動しなかった、と。

2.6 平方 KM の小島は、實際上小さなサンゴ礁であり、多くの車両で構成される長距離ミサイル HQ-9 部隊をその中で機動させることは不可能だ。米軍の如何なる戦闘機もスタンドオフミサイルでこのミサイル部隊を効果的に攻撃するこ

とができる。ベトナム軍にとっても、KILO-636VM 潜水艦から射程 220KM の 3M-14E 型潜水艦発射対地攻撃ミサイルを発射すれば、この陣地を効果的に攻撃できる。また SU-30MKV が搭載する射程 290KM の KH-59MK 空対地ミサイルによっても攻撃可能である。

S-300 及び HQ-9 は安易に配備してはならない。相当堅固に強化された陣地、補給、整備を含む完全な後方支援が必要である。一般状況下において、S-300 及び HQ-9 の配備は、中国本土に先ず陣地を建設しその後に配備を開始する。深圳及び永興島に一度出現した HQ-9 はこれではなく、主として迅速に展開するための訓練であろう。永興島の HQ-9 は、海岸に配備され、平坦地でなく、柔らかな砂浜からは大型の HQ-9 を安定して発射することはできない。

したがって KDR の当初の判断は：主たる目的は、主権を主張するためであり、また輪番で訓練するためであるとした。したがってあまり長い期間は駐屯しないと考えた。

なぜこの微妙な時期に撤収したのか？KDR が各種戦略情報筋から得た情報を総合すると、：中国はこのような動きを示すことによって、米国に対し、南シナ海で米国と徹底して事を構える意思はないことを明確に知らせることにあった、と。中国軍の真の戦略方向は、短期間内においては、南シナ海での争いが第一ではなく、蔡英文時代の台湾にあった。

具体的な動向から見えることは：

- 一、 国際仲裁裁定が中国に不利であっても、南シナ海防空識別圏の設定を急がない。
- 二、 地対空ミサイルを撤収した。
- 三、 黄岩島で直ちに更なる行動を起こすことはできない。戦略情報筋は KDR に対し次のように述べた：黄岩島を調査するだけでも数年間の期間が必要だ。調査に必要な海域、地域は広く、水文資料は未だ掌握していない。この点は、現在埋立中の 7 個の人工島とは状況が完全に異なる。

最も重要な鍵は：中国軍の戦略上の関心は、すでに蔡英文時代の台湾情勢に移っているということである。

中国軍隊の文献を詳細に閲覧すると、次のことが分かる：現在中国軍内での南シナ海問題は、対外的には緊張状態にあるが内部ではそれほど危機感がない。過去 10 年来の軍隊の文献にも、2015 年、2016 年の軍の文献を見ても、作戦想

定に関する文献はおろか、南シナ海で米軍と対決した報告など全く見られない。**KDR** は毎月、相当多くの中国軍の資料、書籍、論文を閲覧している。

中国軍内の戦略、軍事問題、戦法問題に関する論文のうち 80%近くが台湾海峡問題に集中している。この点は、今年も変化がない。20%は、中印国境の防衛、反撃及び作戦想定に関する論文である。つまり今のところ、中国軍の作戦重点、主要戦略方向は、南シナ海ではないことがわかる。

“核心利益”に関する論文の中に、南シナ海及び台湾問題が列挙されているが、排列順序は終始台湾問題が第一である。台湾問題を、“最核心利益”と称している論文もある。

馬英九の時代でさえ、対台湾作戦の準備工作は間断なく行われていた。**KDR** 記者は、最近中国軍の多くの軍事教育資料、装備品の展示資料を調査した。その結果、多くが後方装備の運用について触れていた。対台湾作戦準備の細かさ、技術的綿密さ、は驚くべきものがあつた。

戦車が接岸ののち、如何に迅速に装甲板の通路を開設するか？装甲板の長さ、硬さは如何に設定するか？長さ 35m、幅 5m、15 分間で舗装完了する。

ヘリによる空挺降下の時点では、ホバリング地点をどこにするか？ヘリパッドを如何に敷設するか？

装甲部隊演習時、潜行渡河の基準を 4.5 m としているが、なぜか？ロシアの戦車の最大潜行深度は 5 m である。なぜなら台北河流（實際上淡水河）の最大深度は 4 m であるからだ。

2010 年から、各沿海集団軍は、続々と大量の浮橋を装備しだした。長さ、重量は様々で、“島嶼一機械化浮橋”と称している。長さは、それぞれ 75、109、50 m 級であり、延長、連結ができる。最大舗設長は 1000 m を超える。このことから中国軍がこれらの浮橋を開発、装備する際には厳密に考証し計算していることが分かる。なぜなら台北に接続する淡水河の大多数の河面は、幅が 800 乃至 1000 m 以下であり、最大でも 1250 m であるからだ。

中国軍は、架橋渡河の場面を各種の録画画像で紹介しているが、**KDR** は疑いを持ってみている。中国軍は、淡水河の忠孝大橋、台北大橋付近の河面を詳細に測

量したのであろうか？主として台北に接続する淡水河上の 6 個の大橋は、長さが 400 乃至 1000 M である。衛星写真を見れば、淡水河の台北各地の長さや幅を簡単に測量することができる。しかも台湾の地理表記は相当詳細である。淡水河にかかる多くの橋は日本時代に建設されたものである。

渡江河演習は、近年来大型集団軍、師団演習の主要な演習項目になっている。2013 年以降、大量に公開された報道内容、例えば” 行動使命-2013B” では当時の広州軍区が 300 M の浮橋を 27 分間で架設した。2014 年の広州軍区演習では、架設仮浮橋の戦法を演練した。主要な浮橋の載重量は 50 トンを超える。

2009 年 9 月 5 日、南京軍区舟橋団は、400 名の兵力で 800 M の浮橋を 37 分間で完成した。多くの架橋作戦演習が、長江、閩江上で展開され、最も重い浮橋は 100 トンに達する。2012 年の陸軍舟橋架設演習では 1350 M の浮橋を 38 分間で完成した。しかし淡水河の最大幅は 1250 M である。

中国陸軍は、すでに” 外線作戦、積極防御” の作戦思想を提議し、近年来、一連の架橋演習、砂洲への装甲軌道舗設演習を行っている。このことから対台湾作戦の準備状況をうかがうことができる。その他の架橋作戦演習は、ヤルンツアンボ川や鴨緑江渡河等、“外線作戦” を想定している可能性がある。しかし後の 2 者は、当面要求されてはいない。

KDR の判断が正しければ、習近平は、南シナ海での各種外交軋轢、軍事対決を平息させ、戦略目標を台湾に集中させたいと望んでいるはずである。

以上